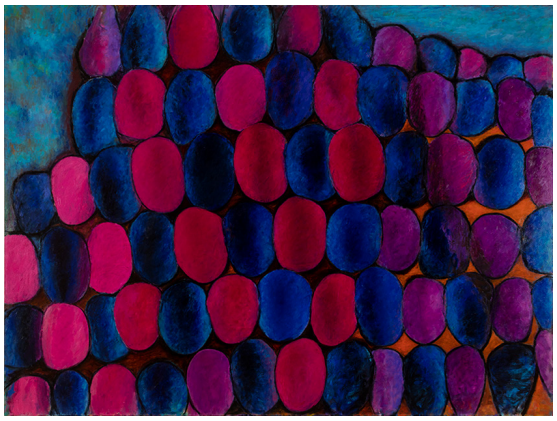
リニューアル・オープン5 周年記念

辰野登恵子 多次元の絵画

2027年1月16日（土）～3月22日（月・休） 本館 展示室1・2・3



《UNTITLED 94-8》1994年 長野県立美術館

出身地・長野県で初の大規模回顧展

長野県岡谷市出身の辰野登恵子（1950～2014）は、日本における戦後の抽象絵画を代表する作家の一人です。

本展では平面のメディアにこだわり、独自のイメージ（形）を追求し続けた辰野の約40年にわたる画業を総覧すると共に、当時の貴重な資料を交え、画家／版画家・辰野登恵子を形作ったもの、そして次世代へ遺したものを解析します。

展覧会名	辰野登恵子 多次元の絵画
会期	2027年1月16日（土）～ 2027年3月22日（月・休）
休館日	水曜日
会場	本館 展示室1・2・3
開館時間	9:00～17:00（展示室入場は16:30まで）
観覧料	一般 1,000（900）円 大学生及び75歳以上 800（700）円 高校生以下又は18歳未満 無料 ※コレクション展［本館・東山魁夷館］との共通料金 ： 一般 1,500円、大学生及び75歳以上 1,100円 ※割引の併用不可 ※（ ）内は20名以上の団体料金 ※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方と付き添いの方1名は無料 ※高校生、大学生及び75歳以上の方は、身分が確認できるものをご提示ください ※長野県内の大学等に通う学生は無料（詳細は当館ホームページ参照）
主催	長野県、長野県立美術館
共催	長野県教育委員会
後援	長野市、長野市教育委員会、岡谷市、岡谷市教育委員会、長野商工会議所、善光寺、長野県芸術文化協会、長野県美術教育研究会、（公財）八十二文化財団、（公財）ながの観光

	コンベンションビューロー、JR東日本 長野事業本部、信濃毎日新聞社、NHK長野放送局、SBC信越放送、NBS長野放送、TSBテレビ信州、abn長野朝日放送、FM長野、INC長野ケーブルテレビ
助成	公益財団法人 花王財団
担当学芸員	池田、霜田、大司

※諸般の事情により、会期などに変更が生じる場合があります。最新情報については当館ホームページをご覧ください。

みどころ

1. 出身地・長野県では初となる大規模回顧展

これまで辰野登恵子の回顧展としては、2012年の「与えられた形象 辰野登恵子 柴田敏雄」(国立新美術館)、2018年の「辰野登恵子 オン・ペーパーズ」(埼玉県立近代美術館、名古屋市美術館)が開催されています。110点を超える絵画、版画、ドローイングで構成される本展は、出身地である長野県内では初の大規模な回顧展となります。

2. 多彩な制作の軌跡を紹介するハイライト

最初の展示室では、辰野の作品世界に触れていただく入口として、ポップ・アートの影響を感じさせる在学中の初々しい作品から初期のミニマルな版画群、サンパウロ・ビエンナーレなどの国際展にも出品された大作、そして新たな方向性を見せた最晩年の版画に至るまで、各時代の代表的な作例をハイライトとして紹介します。

3. 最大級の絵画を 15 年ぶりに公開

1987年の第18回現代日本美術展に出品された《WORK 87-P-10》は横幅3メートルを超える、辰野の絵画では最大級の作品です。2012年の「与えられた形象」展以来、15年ぶりの公開にあたって修復を行い、往時の輝きを取り戻しました。鮮やかな色彩をもって目の前に立ち上がる大画面の作品を、ぜひ会場にてご覧ください。

展覧会概要

戦後日本の抽象絵画を代表する作家の一人、辰野登恵子(1950-2014)。長野県岡谷市に生まれた辰野は東京藝術大学に進学、同大学院修了後はドットや罫線を用いた版画群で頭角を現します。1970年代後半からは本格的に大画面の絵画へ取り組み、表現手段としての絵画の再評価が進む中で主要な存在となりました。

辰野の絵画の特徴は、アメリカの抽象表現主義の影響を受けつつ、それまでの抽象画では出てこなかった、具体的なものを想起させるような形体が描かれた点にあります。大胆かつ繊細な色彩で塗られた菱形や丸などの簡潔な形は、作品を抽象と具象の狭間へと導き、また形と空間との関係、内部と外部といったテーマを浮上させます。そして画面上では、辰野が絵画の本質として捉えていた、異なる次元が共存するような表現が見られます。1990年代からは版画において多様な技法を導入し、豊潤なイメージの表象に専心します。2000年代に入ると多摩美術大学で後進を指導する傍ら、内なる形の描写を深化させ、最晩年にパリの版画工房で手がけた連作では新たな境地を示しました。

本展では、平面のメディアにこだわり、独自の絵画表現を追求し続けた辰野の約40年にわたる画業を総覧します。画家／版画家・辰野登恵子は何処から来て、そして何処へ向かおうとしていたのか、その足跡を振り返ります。

展示構成

第1章　コスモス・ファクトリー

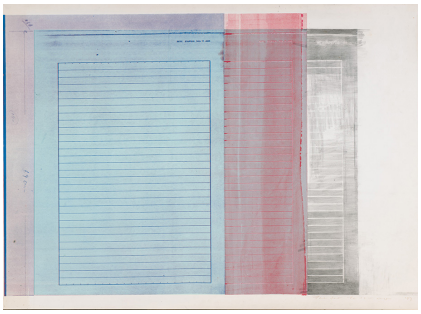
1968年、東京藝術大学絵画科油画専攻に現役で入学した辰野は、3年生の時に同級生の柴田敏雄、鎌谷伸一とともに校内で版画工房「コスモス・ファクトリー」を立ち上げます。工房ではポップ・アートの影響を受けた、写真製版によるシルクスクリーンの版画を主に手がけました。そこでは、刷りムラやインクの掠れにより生まれる差異に着目する、辰野独自の視点が既に表れています。また、この時期の絵画作品では、ゼリービーンズやアメリカ映画の一場面など大衆文化のイメージの引用が見られます。



《Self portrait》1970年
個人蔵　撮影：岡野圭

第2章　「不毛」な版画

東京藝術大学大学院を修了した辰野は、ドットやグリッド、ノートの罫線などをモティーフとした版画に取り組みます。それらは辰野が興味を寄せていた、日常で見かける連続した無機質なもの、それでいて心に引っかかる「不毛」なものでした。そうした「不毛」なものを辰野はわざとずらして刷ったり、上から手描きのような線を刷り重ねたりすることで、無味乾燥なイメージに人間の感情を介入させようと試みました。同時に、版を重ねるという行為自体を強調するかのごとく、透明のフィルムの使用や紙の剥離など実験的な手法も導入されました。



《WORK 77-D-10》1977年　個人蔵　撮影：岡野圭

第3章　抽象絵画とタブー

版画家として評価を得ていた辰野は、表現とは何かを突き詰めたいとして1970年代後半から絵画の制作を再開します。1980年には、荒々しい筆致と深みのある色彩、凹凸のある絵肌を特徴とする大画面の抽象絵画を発表、画家として本格的なデビューを果たしました。一方で、一部の作品にはS字や花柄など、従来の抽象絵画ではタブー同然とされていた、具体的な対象を想起させるようなイメージが描き込まれます。それらは二次元性を強調しながら、時には奥行き、三次元を示唆するような表現がなされており、次元の混交した「多次元」の絵画空間を形成しています。



《WORK 80-P-19》1980年
国立国際美術館



《WORK 84-P-1》1984年
東京国立近代美術館

第4章　内なる形：菱形と丸

1980年代中盤の辰野の絵画には、連なった矩形により構成される菱形と丸が登場します。いずれも巨大かつ簡潔な描写がなされており、特定の何かを示すのではなく、心の内側から現れた形として描かれたものです。このうち菱形について辰野は、空間を囲むことで生じる内側と外側との関係性に着目し、両者の微妙な差異の表出を目指しました。丸に関しては、お茶碗など現実の世界にある物体の形としての丸でも、幾何学的な概念としての丸でもない、中間にある形として捉えており、具象でも純粋な抽象でもない絵画を追求していた辰野の姿勢が反映されていたと言えるでしょう。


《WORK 84-P-7》1984年
いわき市立美術館


《WORK 86-P-3》1986年 国立国際美術館

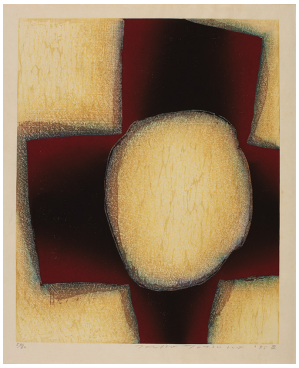
第5章　立ち上がる形

1990年代の作品群では、丸は縁に陰影が施され球体へと姿を変え、増殖して画面全体を覆っています。また新たに登場した、連なる背骨や左右がずれたアーチのような、空間を内包した形もグラデーションを背景に確かな重力をもって屹立しています。当時の辰野は絵画の成立に不可欠な要素としてイリュージョン（奥行き）を捉えており、結果として描く形はより三次元的なものが増えました。それでいて平面的な描写は変わらず併用され、色彩の一般的な視覚効果に反した配色も相まって、鑑賞者の視線は二次元と三次元との間で大きく揺れ動き、絵画の多次元性がより強調されたのです。


《March-3-98》1998年
国立国際美術館

第6章　版画の可能性

大画面の絵画へと展開していった辰野ですが、版画は常にその側らにあり続けました。1990年代は特に版画の制作が集中した時期で、絵画ばりの大型のリトグラフを手がけ、また銅版、木版、リトグラフと3種類の技法を用いた版画集を発行しています。辰野は版種毎の特質による表現の違いを存分に活かし、線の重なりや色面の質感に拘って制作を行いました。さらに、版画工房、摺師とのコラボレーションにより、新たな表現がもたらされることへの期待もありました。


《Spring to Summer III》1995年
長野県立美術館

第7章　ずれと自立

2000年代の辰野の作品には、箱や棚と呼べるような、より具象的な形体が登場します。現実の重力や引力を感じさせるがごとく、目前に積みあがるこれらの形は前後にずれる構成をとることで、手前と奥という立体的な奥行きが生じ、画面に空間が立ち現れています。この頃から辰野は、自分の関心が「ものと周囲との関係」にあり、「もの」が「こと」へと移行する現象を描きたいと繰り返し語っています。ここでは、存在感を増した形の位置や高低という関係性そのものが主題とされました。



《ばら色の前方 後方》2011年
東京都現代美術館

第8章　ほどける形

2011年、辰野がパリの版画工房IDEMで制作した版画では、重量感のある塊やマス目などのモティーフに加え、新たに管のような形が表れます。翌年も同じ工房で版画を手がけますが、確固たる形は画面から姿を消し、ばらばらとほどけた断片のようなイメージが画面全体に広がりました。そこに重力はもはや存在せず、画中の要素はお互いに溶け合い、解体されています。最晩年に見せたこのような変貌は、形から脱却して「多次元の絵画」に取り組まんとする辰野の意志を見て取ることが出来るかもしれません。



《AIWIP-21》2012年 個人蔵
撮影：岡野圭

作家プロフィール

辰野 登恵子　TATSUNO Toeko （1950-2014）

1950年長野県岡谷市生まれ。1968年、東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻に入学、1970年に柴田敏雄、鎌谷伸一と「コスモス・ファクトリー」を結成する。1974年、同大学院美術研究科絵画専門課程油画専攻修了。ドットやノートを用いたミニマルな版画を発表した後、70年代後半から本格的に絵画を手がける。豊潤な色彩と大胆なイメージを特徴とする抽象的な絵画群は、80年代以降の絵画回帰の潮流において唯一無二の位置を占め、高く評価された。1994年、第22回サンパウロ・ビエンナーレの日本代表に選出されると、翌年には東京国立近代美術館で史上最年少での個展が開催される。1996年、第46回芸術選奨文部大臣新人賞を受賞。2003年より多摩美術大学で教鞭を執り、翌年同大学教授となる。2013年、第54回毎日芸術賞を受賞。2014年没。

主な展示作品

作品名	制作年	技法・材質	所蔵先
Self portrait	1970	アクリル、シルクスクリーン・カンヴァス	個人蔵
WORK 77-D-10	1977	鉛筆、シルクスクリーン・紙	個人蔵
WORK 80-P-19	1980	油彩・カンヴァス	国立国際美術館
WORK 84-P-1	1984	油彩・カンヴァス	東京国立近代美術館
WORK 84-P-7	1984	油彩・カンヴァス	いわき市立美術館
WORK 86-P-3	1986	アクリル・カンヴァス	国立国際美術館
UNTITLED 94-8	1994	油彩・カンヴァス	長野県立美術館
Spring to Summer III	1995	木版・紙	長野県立美術館
March-3-98	1998	油彩・カンヴァス	国立国際美術館
ばら色の前方 後方	2011	油彩・カンヴァス	東京都現代美術館
AIWIP-21	2012	リトグラフ・紙	個人蔵

関連イベント

記念講演会 辰野登恵子と絵画

講　　師 ： 南 雄介 氏（美術評論家・元愛知県美術館館長）
日　　時 ： 1月16日（土） 14:00～15:30（開場は13:30）
会　　場 ： 本館 地下1階 ホール
定　　員 ： 当日先着順（70名程度）
参 加 費 ： 無料
申　　込 ： 不要

記念トーク 辰野登恵子 版画制作の現場

講　　師 ： 加山 智章 氏（版画工房 エディション・ワークス代表）
聞 き 手 ： 当館学芸員
日　　時 ： 2月6日（土） 14:00～15:30（開場は13:30）
会　　場 ： 本館 地下1階 ホール
定　　員 ： 当日先着順（70名程度）
参 加 費 ： 無料
申　　込 ： 不要

ギャラリートーク（担当学芸員による展示解説）

日　　時：2月27日（土）14:00～（30分程度・予定）
会　　場：本館 展示室1・2・3
参 加 費：無料（観覧券が必要となります）
申　　込：不要（ご参加の方は、14:00までに展示室1入り口にお越しください）

※諸般の事情により、イベント内容の変更や入場を制限する場合があります。
※障がいのある方やサポートが必要な方、手話通訳や要約筆記を希望される方は、2週間前までにご連絡ください。

■ 報道関係のお問い合わせ
長野県立美術館　総務課　広報係　（※2026/4/1～　担当課・係名が変更となりました。）
〒380-0801長野市箱清水1-4-4（善光寺東隣）　ホームページ：https://nagano.art.museum
TEL：026-232-0052　FAX：026-232-0050　E-mail：nam-pr@naganobunka.or.jp